

軍事史学

第46卷 第2号

巻 頭 言

軍事と衛生

東 威 志

明治維新後、欧米列強に伍する近代国家を早急に建設するため、富国強兵・殖産興業を合言葉に、まさに死に物狂いの国づくりがなされた。それゆえ、軍事に投入された資源は、桁はずれに多く、それは当時の社会をリードするものであった。医療の面に於いても軍陣衛生が医療をリードしていた事實は、一般にはあまり知られていない。医学がさまざまに専門分野ごとに分かれて治療を行なうようになったのはつい戦後からであるが、軍病院においては明治からすでに脳外科、形成外科等の専門治療が行なわれていた記録が残されている。また、大衆薬として人気のある正露丸も、元は軍で使われていたものである。

陸上自衛隊衛生学校には、奇跡的に戦災や接收から逃れたそれらの歴史の生き証人の史料が大切に保存されている。軍医学校参考館所蔵品や、戦後になって大東亜戦争衛生史編纂の参考資料として多方面から寄せられた資料が集められ、一部は原状のまま展示されている。それら「彰古館」の収蔵品には、小学生のランドセルの原型となった医療背囊、わが国初の三角巾包帯、わが国現存最古の臨床用X線装置と撮影像、日露戦争後世界初の作業用能動義手、その他多数の医療機器、診療記録、医学書などがある。それらは、明治初期の神風連の乱から大東亜戦争に至るまでの数々の戦乱等を記録したのみにとどまらず、軍陣衛生を通じ当時の社会を映した鏡ともいえるものである。

歴史に学ぶためには、まず事実を明らかにし、そしてその事実を認識する作業が必要になる。認識にあたっては、人間の営みが介在するため、主観フィルターがかかることは避けられない。ある事実に対し、勝者と敗者、或いは被害者と被害者では、認識が異なるのは当たり前である。しかし、互いの認識を理解することは出来る。歴史を研究するために、事実と認識は明確に区別しなければならぬ。歴史事実を学問的に探求することは、あらゆる立場の認識作業のベースになるものである。真摯に歴史事実を探求する研究者が、もの言わぬ史料たちに正当な証言の機会を与えてくれることを切に願っている。(陸上自衛隊衛生学校長)